

伊藤喜栄先生と伊藤家の食卓

八久保 厚 志

1. 伊藤喜栄先生の軌跡

本学外国語学部伊藤喜栄先生は、平成一四年三月をもって定年退職された。先生の軌跡について、後任として述べることができるのは大変なお役目である。と同時に嬉しいことでもある。もとより、相応しい諸先生方には恐縮なことであり、僭越であることをお許し願いたい。

さて、先生は、昭和六（一九三一）年に愛知県にお生まれになった。昭和二五（一九五〇）年、県立一宮高等学校を卒業されると同時に、名古屋大学の工学部に入学された。その後、地理学研究を志され、翌年、文学部史学科地理学専攻に転部された。続いて同大学院に進まれ、昭和三六（一九六一）年に同大学院博士課程を修了された。この間の詳しい事情については、先生自身で触れられている（The monado: No.21 神奈川大学外国語学部基本部会）。

大学院修了と間をおかず、大分大学経済学部専任講師をかわきりに、名古屋市立大学教養部助教、金沢大学法

文学部助教授、慶應義塾大学経済学部教授を経て、平成三（一九九一）年四月より本学外国語学部教授に就任された。この間、山形大学人文学部、お茶の水大学大学院文学研究科地理学専攻、国際基督教大学教養学部、都留文科大学、関東学院大学経済学部、横浜国立大学教育学部等で非常勤講師を歴任された。また、ハーバード大学、MIT、ルール大学・ミュンスター大学、シェフィールド大学等の研究所において、招聘研究員や在外研究員も歴任された。社会的活動の面でもご活躍された。代表幹事や評議員を歴任された経済地理学会、協議員をされた人文地理学会での活躍にとどまらない。平和経済計画会議理事、中部圏二一世紀委員会委員（国土庁）などのほか、日本学術会議第一部人文地理研究連絡委員、同第三部経済政策研究連絡委員等を勤められている。

先生の専攻は人文地理学、とりわけ経済地理学である。先生の業績もおおよそ、織物業の地域的性格、産業経済の地域構造、工業用地と地域開発、地域政策と産業立地政策に関するものが多い。また、都市構造とその形成過程、土地利用、人口移動など人文地理学のほとんどの領域にわたっている。主要なフィールドは、先生の教歴にともなうかたちで、中京圏、北陸、九州、関東のほか英国および英語圏であるように見受けられる。地理学者は、職場の立地との関連でフィールドを多様化しなければならない社会的な要請があり、先生の業績にも、これに応えられたものが散見される。この中で筆者が特に記したい業績は、『日本の町と村』（古今書院）と『図説日本の地域構造』（古今書院）、『現代世界の地域システム』（大明堂）と『立地と空間上下』（古今書院）、『大学の地理学Ⅰ自然地理学の基礎』・『大学の教科書Ⅱ人文地理学の基礎』・『大学の教科書Ⅲ地理学の諸問題と分析手法』（古今書院）である。

『日本の町と村』は、後に、「湯河原グループ」と称されるようになる、気鋭の若手地理学者の真摯なる討論の結果世に出たものである。構成メンバーは、伊藤先生の他、板倉勝高（東北大）、井手策夫（立正大学）、浮田典良（京

都大学)、金田昌司(中央大)、高橋潤二郎(慶應義塾大学)、竹内淳彦(日本工業大学)、村田喜与治(中央大)等(いずれも当時)の諸先生方であり、その後日本の、地理学会を牽引するビッグネームばかりである。本書の中で伊藤先生は、その成立過程でどのような議論がなされたかについて言及されている。現下の地理学会の現状を斜め見る限りでは、このような真摯な議論の場がどこにかあるのだろうか、と考えてしまうくらいの文章である。『図説日本の地域構造』は、伊藤先生、浮田先生を中心に編集された、主題図や図表現の便利なテキストとしてばかりでなく、日本列島の、自然・人文地理の姿をわかりやすく解説したものである。本書は、出版から時間がたっており、新版もしくは改訂版の発行が期待されてきたが、未だ発行されていない。筆者は大学の講義でその利便性のためによく利用しており、伊藤先生に新版の進捗具合をお聞きしたことがあった。執筆はすでに最終段階にある由、ご期待申し上げたい。

『現代世界の地域システム』と『立地と空間上下(翻訳)』は、先生が海外研修や、在外研究員として英国、ドイツを中心に研究活動を積み重ねてこられた結果であると見受けられる。両書とも多くの共同研究者とのジョイントであり、先生が監修されている。

『大学の教科書Ⅰ自然地理学の基礎』・『大学の教科書Ⅱ人文地理学の基礎』・『大学の教科書Ⅲ地理学の諸問題と分析手法』は、英国における高等学校のグレード(A)の地理学テキストの翻訳書である。本書も多くの共同研究者が参画している。伊藤先生はかねてより、日本の大学教養課程における地理教育に対して、標準となるテキストに乏しいことを指摘してこられた。それは、長らく教養課程での地理教育において、受講生の地理的情報の少なさや偏りといった、現場からの感慨であったとおもわれる。したがって、本書の翻訳刊行は、先生の一結論の教示か

と思われる。筆者もまた、同様な感慨におそわれることが多い。これは高等学校までの地理教育が、知識詰め込みを前提とした、世界全体の地誌、日本全体の地誌から、国際理解と国際共生、環境教育、地理情報教育にその重心を移してきたからに他ならない。要するに、情報化が進展した結果、地理的情報の取得よりも、知識の応用、理論的な展開、情報技術の取得を求める方向にあるということなのかもしれない。しかし、地理学徒の多くは、地理学的知識の拡大という知的な興味からこの世界に入り込んできたのではなからうか。知識が乏しければ想像や予測などが、より多様になることには限界があるのではないか。今後、文部科学省の地理教育については一考が必要になってこよう。

話が伊藤先生からはずれてしまったようだ。本題に戻ろう。伊藤先生の業績に共通する手法的特徴は、先生を中心にゼミナール活動がその中核となっていることである。それは大学院時代、若手研究者の時代、円熟した時代、近年というように、時間的な区分ができそうに思われるが、筆者にはそれをまとめる力が無い。そこで次に、伊藤先生の人となりをも、筆者が経験したことから接近を試みたい。題して「伊藤家の食卓」。

2. 「伊藤家の食卓」

ゼミナール活動は、大学生生活上最も重要な要素であろう。伊藤先生が様々な段階でゼミナールを主催され、社会的な要請に応えてこられたことは先に述べた。伊藤先生が退職され、その記念？（もしくは区切り）のゼミナールが昨春に行われた。東洋経済新報社のビル内で行われたが、先生の他、地理学ばかりでなく、経済学などの大学関係者の他、行政関係者、編集者、シンクタンクから多数参加者があった。多くの方々は、名古屋大学大学院時代の

同窓生、大分大学・金沢大学等の同僚の先生方、金沢大学、慶應義塾大学、国際基督教大学、神奈川大学時代の教え子の方々であり、伊藤ゼミの構成員であった。筆者は、先生の後任ということで、この会に参加を許され、それまでおつきあいが少なかった先生方と交流ができ、個人的には有意義な一時であった。会は二部構成で、一部は研究集会、一部は懇談会であった。いくらかお酒を召された先生と、その他ゼミナル構成員との議論は（論戦といっても善いくらいの内容であった）、真摯で、いつ終わるかと思われくらいであった。そこには先輩も後輩も、先生も学生もない一地理学徒として、各人が各様の議論を展開されていたのである。面食らった筆者は、ちゃんと記録することもできず、聞き流すだけであった。酒が入ると論理的な議論などできない性分の筆者にとって、ちよつと相容れない（自分だけ仲間はずれたかな、というくらいのこと）、場違いな感があった。

ずいぶん長々と文を連ねてきた。言い忘れたこと。つまり筆者と伊藤先生の接点についてのべる。もとより、先生を筆者が初めて知ったのは、文献からであった。地場産業に興味がでてきた大学院時代、中京圏の織物産地の研究には、伊藤論文の理解は欠くことができなかった。その後、学会などで先生の諸説を拝聴していた。このころちよつとした偶然があった。筆者は大学院時代、シンクタンクで地域産業活性化についてお手伝いをしていたことがあった。そのアルバイト仲間に、伊藤先生のお嬢様がいらっしゃったのである。そこでいくらかの機会に人間「伊藤喜栄」先生のお人柄に接することができた。このことは望外の喜びであった。そこでのお話で興味深かったのは、後に、奥様や、お姉さまからも同様なお話を聞きすることになるある情景である。「伊藤家の食卓」は、まるで教室のように、学問的な会話が飛び交っており、二人のお嬢様は、取り立てて勉強しなくても、人間の真理、世界や日本の歴史、地理、文学、文化等々、その他の分野にわたって学ぶことができたそうである。それこそ、食卓が教

養教育の現場であった由。したがって、平成七年の年末頃、東京農業大学の高柳長直先生を通して、神奈川大学の非常勤講師のお話を得た折り、「あの伊藤喜栄先生」と同じ言語でお話していただけるのだろうかと心配したものである。その私に、講義は「自由にやって下さい」と、何の制約もなしにお話を進めていただいたのである。

さて、最後に昨年、先生は人文研究所報に一本の論文を寄稿された。それは一九九〇年代、日本の経済地理学会において、産業集積現象に対する関心が高まって以来、英語圏の経済学者を中心として経済地理学の再評価の流れがみられることを示し、これらの思潮が、従前の集積論のどこと異同があるのかを批判的に示された。つまり、外来の、しかも新しく見える理論を無批判に導入することに疑義を示されたのである。このことは、若い経済地理学者がもう一度検討すべき事であろう。先生が筆者たちに残された宿題であると考えられる。心したいものである。なにやら論旨があやふやになってきた。紙幅も尽きた。最後にはなったが、先生、お身体大切に。今後とも私たちのゼミナールのご指導お願いただければ幸いです。